

漢代辭賦の推移：「大人賦」の變貌を中心に

中村，昌彦
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9727>

出版情報：中国文学論集．15，pp.25-48，1986-12-31．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



漢代辭賦の推移

—「大人賦」の變貌を中心に—

中 村 昌 彦

一

前漢辭賦文學の隆盛は、武帝期（B.C. 140—B.C. 87）にあり、とりわけ司馬相如（B.C. 179—B.C. 118）の活躍が群を抜く。この隆盛を極める以前、長安以外の地方（江淮地方）ではサロン文學活動が行なわれ、宮廷文學としてふさわしい辭賦のスタイルが磨きあげられていた。そのスタイルの一つの完成された型が、枚乗（B.C. ?—B.C. 140）の「七發」であろう。この「七發」は、やがて枚乗と同じように梁の孝王のサロンで學んだ司馬相如によって、「子虛・上林賦」として磨きあげられる。そしてこれが、前漢末の揚雄（B.C. 53—A.D. 18）の辭賦、更には後漢の辭賦を代表する班固（A.D. 32—92）によって、「兩都賦」として繼承されていく。これが、漢代を代表する辭賦文學の本流である。

漢代辭賦の推移（中村）

これと平行して「楚辭」文學の原始的スタイルをまねた創作活動がある。原始的スタイルとは「離騷」のことを指す。一般に、この創作活動の流れは、後漢の王逸（生卒年不明）の編纂になる『楚辭章句』に取られた作品を根據に考える。そして、辭賦の本流にいる司馬相如が作った「大人賦」も、この「離騷」の模擬創作の流れの上にあるものであり、具體的には表現、内容の上からすでに先人が指摘するごとく、「離騷」中の遠逝をテーマにした部分や、一篇としてまとまりをもつ「遠遊」篇に關係する作品である。その關係の上から見ると、「楚辭」文學の原始的スタイルである「離騷」、及び「遠遊」篇は、武帝期に到り司馬相如という大辭賦作家によって「大人賦」に變貌させられたと考えることができる。とすると、この變貌の過程における司馬相如の役割は、「楚辭」の悲劇のヒーロー屈原を天子にすり替えて、天子を讚美する漢賦に仕上げた點にあるといえよう。

ところが、このように漢代辭賦の推移の上で多大な役割を果たす司馬相如の「大人賦」も、他の「子虛・上林賦」のように、その後も繼承されるべきところであるが、司馬相如より下って前漢後期から後漢を通じ、なんとその「大人賦」を模擬した作品が見られない。これはなぜであらうか。またその代りに、「大人賦」以前の「遠遊」という表現スタイルを用いた創作が續けられる。しかし、それらの「遠遊」型の作品は、王褒（B.C. 1- B.C. 6）や劉向（B.C. 7- B.C. 6）等の屈原賦模擬作品を除けば、「大人賦」以前の、例えば「遠遊」篇と比較すると、作品中の主人公に對する作者の考え方が異なる。つまり、司馬相如によって「大人」化された屈原は、もはや作品中の主人公ではなくなり、新たに作者自身が作品中の主人公となるのである。そして、それまで作品内部を支えていた神仙思想、老莊思想は、主人公である作者自身の處世を支えるものとして提示されることとなる。これは一體なぜで

あろうか。この論文では、以上の問題點に立つて、『漢書』(30)藝文志・詩賦略に見られた、「其後宋玉、唐勒、漢興枚乘、司馬相如、下及揚子雲、競爲侈麗閎衍之詞、沒其風諭之義。」という前漢末の辭賦文學に對する反省的見解以後、どのように後漢の辭賦文學、特に班固の辭賦が形成されていくのかを探ってみたい。

『後漢書』(40・上)班固傳には、「固(班固)感前世相如、壽王、東方之徒、造構文辭、終以諷勸、乃上『兩都賦』」とだけいい、また班固の作とされる『文選』兩都賦序においても、「故言語侍從之臣、若司馬相如、吾丘壽王、東方朔、枚臯、王褒、劉向之屬、朝夕論思、日月獻納、而公卿大臣、御史大夫倪寬、太常孔藏、太中大夫董仲舒、宗正劉德、太子太傅蕭望之等、時時閒作。或以抒下情而通諷諭、或以宣上德而盡忠孝、雍容揄揚、著於後嗣、抑亦雅頌之亞也。」とだけしかいわないように「詩賦略」の反省的見解以後、班固までの情況について、「詩賦略」編纂の責任者でもある班固は、特に何も言及せず自己の辭賦創作活動を開始している。しかれば、實際、前漢末から班固の處女作、「幽通賦」までに作られた辭賦の表現スタイル、思想性を検討してみないかぎり、その班固による具體的な説明がない情況は明らかにならないのである。³⁾ただ、この期間には、辭賦文學が急激に收束してしまった時であり、王莽(B.C. 51-A.D. 23)という革新勢力が擡頭した時でもある。武帝、宣帝時代のように辭賦文學の花開いた時勢とは違い、宮廷文學を遊ぶ暇さえ許されない緊迫した時勢であった。このような時勢を考慮しながら先に提出した問題を考えてみたい。

二

まず最初に問題とした、なぜ「大人賦」が漢代において後の模擬作品を生み出さなかったのかについて考えてみたい。

武帝期に司馬相如が「大人賦」を作り、この「大人」が、絶大なる武帝權力を象徴した。たとえば、唐の顔師古(A.D. 581—645)は、『漢書』(57・下)司馬相如傳の中で、この「大人」を「大人、以諭天子也。」と注するがごとく、「大人」は武帝の明白な比喩であった。いま、文學・思想の上からこの「大人賦」を見た場合、「遠遊」篇のもつ神仙的、老莊的思想の延長上にこの「大人賦」があることは、すでに先人の指摘する⁽⁴⁾とおりであろう。

ここで再びこの「大人賦」をその當時に立ち返って捉えてみると、この賦が、あまりにも武帝という傑出した天子を超人的能力の持ち主として、賦中の主人公にしてしまったために、それ以外の何者にも「大人」を適應できなかったであろうことが推察される。『漢書』(57・下)司馬相如傳には、この「大人賦」が世上に生まれ出た経緯について次のように述べてある。

相如拜爲孝文園令。上既美「子虛」之事。相如見上好僊、因曰、『上林』之事、未足美也。尙有靡者。臣嘗爲『大人賦』、未就、請具而奏之。相如以爲列僊之傳居山澤間、形容甚臞、此非帝王之僊意也。乃遂奏『大人賦』。

つまり、相如は、神仙にあこがれる武帝の好尚にびったり迎合した賦を作ろうとしたのである。そしてこの目的

は十分に遂げられたようで、同じ司馬相如傳では賦を奏し終った後の天子の様子を「天子大説、飄飄有陵雲氣、游天地之間意。」という。

このように、あまりにも神仙に没頭する武帝のイメージと、「大人」のイメージとが合致したがために、逆に漢代辭賦の上では、武帝以外に「大人」をもって賦したものが再び作られることはなかった。これは、武帝という賦される對象の特異性から考えたものであるが、一方、この賦を支える思想の上から考えてみると、また別の理由が考えられる。

司馬相如は、「離騷」或いは「遠遊」篇の主人公である屈原を、天子にすり替えて「大人」としたことはすでに述べた。司馬相如は、武帝を讃えるため、「大人賦」の中で「大人」を萬物の絶對者としている。しかし、それは辭賦の世界における象徴であって、現實社會の上で政治はもとより、天文現象、人間の生死等の萬事を支配する絶對者にはなりえない。ところが當時はすでに、政治理論も含めて司馬遷（B.C.145—B.C.86?）や董仲舒（B.C.179—B.C.104）等の著作に見られるように、「天道」或いは「天命」という天子以上の力の存在に對する議論がなされていた。⁽⁶⁾これは次第に思想性を深め、前漢王朝の衰退とともに現實的な影響力をもち、政治思想と一體化してしまふ。王莽政權（A.D.9—23）の確立にともなう讖緯思想の流行がそれである。そのような「天人合一」の思想を十分了解し、それを辭賦創作の上にも反映させたのが揚雄であった。⁽⁷⁾揚雄は、最初、司馬相如をも凌駕するがごとく、その文才をめざましい勢いで辭賦創作に注いだ。が、このような揚雄も、ついに「大人賦」を作ることにはなかった。これは、後に『太玄經』という『周易』に倣った書物を作ったことから推測されるように、萬物の現象を

「幽玄」の原理に基づいて考えるようになったことと關係する。つまり、一代の天子を「大人」に見立て、自由自在な遠遊をさせてみたところで、天子そのもの、或いは修正すべき國政のあり方に對し、正しい批判を浴びせることはできないと考えていたのである。揚雄は、その考えにより、自らが師として抑いだ司馬相如の「大人賦」を評して次のようにいう。

雄（揚雄）以爲賦者、將以風也、必推類而言、極麗靡之辭、閎侈鉅衍、競於使人不能加也、既乃歸之於正、然覽者已過矣。往時武帝好神仙、相如上「大人賦」、欲以風、帝反縹緲有陵雲之志。繇是言之、賦勸而不止、明矣。（『漢書』八〇・下／揚雄傳）

このように揚雄は、特に「大人賦」における諷諫的効用のなさを非難している。結局これも、揚雄の『太玄經』をはじめとする學問上の觀點から見た辭賦に對する批判である。つまり、政治思想にからむ揚雄の思想研究からみて、すでに絶對者たる「大人」は、辭賦には存在しえなかったのである。揚雄はそのことを、晩年の作である「太玄賦」の中で訴えている。「觀『大易』之損益兮、覽『老氏』之倚伏。省憂喜之共門兮、察吉凶之同城」で始まる「太玄賦」は、『太玄經』を根底にした「幽玄」の理念を「遠遊」型の辭賦體で解くものである。そして、本文を總括する「亂」において、「大人」の本來の姿であつた屈原を否定し、「太玄」を重視する揚雄自身の態度を次の様に明確に打ち出す。

屈子慕清 屈子清を慕ひ

葬魚腹兮 魚腹に葬らる

……
何足稱兮 何ぞ稱するに足らん

……
我異于此 我此れに異なり

……
執太玄兮 太玄を執る

このように、司馬相如を慕う揚雄ですら「大人賦」を模作しえなかった理由について考えてみると、窮極的には「大人」が當時の政治思想の上から、絶対性を有する者ではないとされたからである。また、この「太玄」を主張する際、だしに使われた屈原は、政治思想にからむ揚雄の學問的研究の上で、かなり重要な批判の對象となっていたらしい。つまり、「大人賦」を模作しえなかった理由が、一方でこの屈原批判と關係しているのである。次に、このことを揚雄の作品全體の性格から考えてみることにする。

「離騷」をはじめとした「屈原賦」の整理編纂については、劉向の死亡年（緩和元年四〇〇）までには少なくとも「屈原賦」二十五篇がまとめられ、清の顧實がいうように、^⑧「離騷」一篇、「九歌」十一篇、「天問」一篇、「九章」九篇、「遠遊」・「卜居」・「漁父」三篇をもってそれが構成されていたはずである。司馬相如の辭賦は、この「屈原賦」の屬として「詩賦略」に記録されている。ここからすると、武帝期にあって輝かしい活躍をした司馬相如も、「詩賦略」では「屈原賦」の系譜の上に考えられていたことがわかる。「詩賦略」中では、「屈原賦」の屬以外を、「陸賈賦」の屬、「孫卿賦」の屬、「雜賦」の屬に分類しているが、現在のところその分類上の基準は不明確であ

漢代辭賦の推移（中村）

る。しかし、現存する作品の表現法や内容の類似性からすれば、顧實の考えるような根拠が確かにあったであろう。とすれば、ここで、揚雄が「揚雄賦」十二篇として「陸賈賦」の屬に入れられていることは注目しなければならない。本来、司馬相如を師として仰いだはずの揚雄が、「屈原賦」の屬に入れられないのは、何らかの特別な理由があるはずである。その理由として、今問題にしている「大人賦」との関連、更には屈原批判との関係が考えられる。

「揚雄賦」十二篇の内容をみた場合、顧實もいうように直接「大人賦」に關係する作品はない。あえて取り上げれば、表現の類似から「遠遊」型に近い「太玄賦」がある。しかし、これについては先に述べたとおり、「大人」を超越した「幽玄」という萬物の根源を解いた辭賦であり、「大人」はもとより、屈原的悲劇のヒーローも存在しない。むしろ屈原は、「何足稱兮」とまで否定されていた。このように、「幽玄」の原理を絶對視した「太玄賦」は、表現の上では「遠遊」型辭賦と類似しながらも、「屈原賦」の屬からは除外されたのである。つまり、「屈原賦」の屬の性格として、「楚辭」という表現テクニク上の問題とともに、屈原という悲劇のヒーローの存在性が問題となろう。だからこそ、司馬相如を慕う優れた辭賦を残した揚雄でさえも、結局は、全體としても「屈原賦」の屬から除外されたのである。つまり言い換えれば、屈原の變貌である「大人」を描きえなかったがためだともいえる。以上、考察してきた「詩賦略」における揚雄賦の性格への判斷は、いずれにせよ揚雄の辭賦の中に「大人賦」が存在しない理由を裏づけることになる。

そして、更にここでもう一點、揚雄が「屈原賦」の屬から除外される理由を考え、「大人賦」が存在しない理由

を明確にしておきたい。それは、「反離騷」、「廣騷」、「畔牢愁」という一連の作品群の問題である。いずれも屈原の「離騷」に關わる作品であるが、單に「離騷」を模擬しようとしたのではない。「反」は「反復」、「廣」は「擴大」の意味だとしても、現存する「反離騷」の作品からみて、逆にそれは、「離騷」に對し反駁する内容をもつ。窮極的には、屈原そのものへの批判なのである。言いかえれば、「大人」への批判なのでもある。これは、「太玄賦」における屈原に對する見方と同様に、「屈原賦」の屬から除外される決定的理由となろう。

以上、「詩賦略」の「揚雄賦」に對する判斷からすると、揚雄は、「太玄賦」、「反離騷」を根據に、「屈原賦」を批判的な目で捉えた上、その變貌である「大人」をも否定したと考えてよい。

このような揚雄の態度を通して、再び、なぜ「大人賦」が漢代において繼承されなかったのかについて考えてみると、つまり、辭賦文學の中に屈原批判を含めた眞實を追求する學問の觀點を取り入れたことにより、更にはそれが現實の政治思想をも辭賦に反映させることになり、結局、「大人」は不要のものとなったからなのである。

三

次に、「大人賦」が繼承されなかった代りに出現した、「遠遊」型の辭賦について考えてみたい。まず劉歆(B.C. 53?—A.D. 23)を取り上げる。

劉歆は、同時期の揚雄と王莽との關わりの中で、二、三の辭賦作品を残す。その創作において、揚雄ほど目立った活躍はしていないが、揚雄が元延元年(B.C. 12)に京師に上り、翌年、はなばなしく、「甘泉賦」、「河東賦」、

漢代辭賦の推移(中村)

「校獵賦」を作った時、同様に「甘泉宮賦」を作っている。その賦の内容は、揚雄と同じく甘泉宮における頌詞である。そして、建平三年（B.C. 6）に揚雄が「太玄賦」を作ったのに對し、それより二年遡る建平元年（B.C. 7）に、古文經の主張で左遷された際、「遂初賦」を作った。この賦には「大人」は存在しない。その代り、作者劉歆が作品中の主人公として現われる。それは、そもそもこの賦を作るきっかけが、『古文苑』中の「遂初賦」の序によると、自己の不遇によるものであるからだ。その経緯をみると、劉歆は、父、劉向の學問を受け継ぎ、學術的作業をする中で、古文經の學問を主張した。その際、儒者師丹等の怨みを買ひ、五原（綏遠省五原縣）に左遷されることになる。その事情について『漢書』（36）劉歆傳に次のとおり説明する。

及歆（劉歆）親近、欲建立『左氏春秋』及『毛詩』、『逸禮』、『古文尚書』、皆列於學官。哀帝令歆與五經博士講論其義。諸博士或不肯置對、歆因移書太常博士、責讓之曰、……、其言甚切、諸儒皆怨恨。……、歆由是忤執政大臣、爲衆儒所訕、懼誅、求出補吏、爲河內太守。以宗室不宜典三河、徙守五原、後復轉在涿郡、歷三郡守。數年、以病免官、起家復爲安定屬國都尉。

この左遷の際、作ったと思われる「遂初賦」の内容は、劉歆が古文經主張に反對する者に排斥された不満を懷き北方の五原を目指して行く紀行である。ここに到って、はじめて「離騷」以來の「遠遊」型辭賦が、現實の不遇を苦しむ士大夫の紀行文に變貌したのである。そのことは同時に「大人賦」の變貌でもある。この「遂初賦」の表現スタイルは、基本的には「遠遊」型であるが、作者自身の紀行文であるために、立ち寄る先々の土地の情景描寫がそれまでの「遠遊」型辭賦に比べはなはだリアルである。具體的には、我身の進むべき方向を星宿によって定めた

後に、「太行山」を越え、「天井關」に入り、實際の旅が開始される。その後、順を追って「高都」、「長子」、「屯留」、「余吾」、「下虢」、「銅鞮」、「太原」、「晉陽」、「句注」、「雁門」、「雲中」と進みながら、その土地にまつわる歴史事實を織り込み述べていく。たとえば、「執孫蒯于屯留。今、救王師於余吾。」の「屯留」にまつわる「孫蒯」については、『左傳』襄公十八年の記事に基づき、「余吾」にまつわる「王師」については、『左傳』成公元年の記事に基づいている。このような歴史事實の回顧をはじめ、全體としては宗周の衰退を次のように嘆くのである。

背宗周而不卹兮 宗周に背くも卹へず

苟儉樂而情怠 苟儉して樂しみ、情怠たり

枝葉落而不省兮 枝葉落つるも省みず

公族闋其無人 公族闋かなること其れ人無きがごとし

日不悛而兪甚兮 日々悛めず兪々甚し

政委棄於家門 政は家門に委棄せらる

載約屨而正朝服兮 約(絢)屨を載せて朝服を正し

降皮弁以爲履 皮弁を降して以て履と爲す

寶礫石於廟堂兮 礫石を廟堂に寶とし

面隨和而不眠 面は隨和なるも眠ず

始建衰而造亂兮 始め衰建りて亂造り

漢代辭賦の推移(中村)

公室由此遂卑 公室此れ由り遂卑す

ここに描かれた宗周の衰退が、直接、劉歆の世情、つまり成帝から哀帝へ移る不安定な情況を意識したものであると断定はできないまでも、紀行を通して歴史事實を回顧する態度は、「大人賦」はもとより、「遠遊」篇のように、神仙へのあこがれを「遠遊」という文學スタイルで實現させる態度とは異なる。ところが、このような特色をもつ「遂初賦」も、遠遊の目的地までのリアルな情景描寫と、衰退した宗周への嘆きを述べた後は、結局、老莊思想に我身を委ねてしまうのである。

劉歆は、目的地「五原」に到ると、戰國時代の趙の「武靈王」や同じ「趙奢」の遺光を求め、我身の行く先を見定める。

於是勒障塞而固守兮 是に於いて障塞を勒めて固く守り

奮武靈之精誠

武靈の精誠を奮ふ

據趙奢之策慮兮

趙奢の策慮を據べ

威謀完乎金城

威謀は金城を完つ

外折衝以無虞兮

外は折衝して以て虞ふる無く

內撫民以永寧

内は民を撫して以て永く寧んず

既邕容以自得兮

既に邕容以て自得し

唯惕懼於竺寒

唯だ竺き寒さを惕懼す

攸潛溫之元室兮

攸として溫の元室に潛^{ひそ}み

滌濁穢於太清

濁穢を太清に滌^{あら}ふ

反情素於寂寞兮

情素を寂寞に反し

居華體之冥冥

華體の冥冥に居る

玩琴書以條暢兮

琴書を遊び以て條暢し

考性命之變態

性命の變態を考ふ

運四時而覽陰陽兮

四時を運^{めぐ}らして陰陽を覽^み

總萬物之珍怪

萬物の珍怪を總^すぶ

雖窮天地之極變兮

天地の極變を窮むと雖ども

曾何足乎留意

曾ち何ぞ意を留むるに足らん

長恬淡以權娛兮

長く恬淡として以て權娛するは

固賢聖之所喜

固より賢聖の喜ぶ所なり

ここに見られる「自得」「莊子」駢拇、「太清」「莊子」天運、「寂寞」「莊子」刻意、「恬淡」「老子」31等の單

語をはじめ、老莊思想に關わる内容は、「大人賦」において認められた思想上の特徴であつた。⁽¹¹⁾尙、「遂初賦」に

「亂」として述べられる中に登場する「大人」は、老莊思想上の「大人」であるが、「遂初賦」全體における主人公ではない。つまり、「大人賦」における「大人」のあり方とは本質的に異なる。

漢代辭賦の推移（中村）

結局、「遂初賦」は、自己の體驗を中心に構成されてはいるが、最終的な身の置き場所を老莊的世界に定めている點は、「大人賦」や「遠遊」篇と同じである。しかし、「遂初賦」に到って、作品中の主人公を作者自身に變貌させたことは、それまで公的宮廷文學として變貌していった辭賦が、再び私的體驗文學に逆行していったということである。ここにいる作者の創作態度は、司馬相如のような、天子讚美第一主義の態度とも、王褒や劉向の「遠遊」型のような、屈原を悲劇のヒーローとする虛構文學の態度とも異なる。これに比べ、揚雄の「太玄賦」における作者の立場は、それまでの「遠遊」型辭賦より明確にされてはいるが、作品全體としては、「太玄」という思想上の原理を追求する點に重點がある。そして、揚雄の場合、「遂初賦」のようにには自己の現實的問題を辭賦の表面に遂に表わさなかったが、それは、揚雄の辭賦が天子讚美第一主義の司馬相如を師事するからであり、逆に「離騷」のテーマである屈原終焉に對する讚美主義に對しては否定的であつたことにもよるのであろう。つまり、辭賦に對する態度が劉歆とは基本的に違ふのである。

ともかくも、前漢末、やがて王莽の獨裁が始まろうとする頃、「大人賦」から更に思想的に純化した「太玄」という『易』の理論に言及する「太玄賦」と、より自己の體驗に根ざした表現、構成を用いた「遂初賦」とが出現したのである。どちらも同時代のもので、屈原が悲劇のヒーローとなることへの疑問が提出された後に生まれた辭賦だったのである。つまり、「遠遊」型の辭賦であつても、その作品内部の主人公と、その思想性（屈原否定に立つ老莊思想）とから、明らかに「大人賦」はもとより、それ以前の「遠遊」篇とも異なる辭賦に變貌していたのである。

四

次に、揚雄の「太玄賦」と劉歆の「遂初賦」以後の情況を見てみたい。

哀帝期(B.C.6—B.C.1)から平帝期(A.D.1—5)に入ると、中央の政界は王莽政權一色になり、辭賦の創作はほとんど見られず、その代りに、歴史を學問的に研究する風潮が高まる。まずは、劉歆が元始中(A.D.1—5)に『三統曆譜』を著わす。この著作も王莽との密接な關係の上にあったものである。王莽と劉歆との關係は、劉歆が五原に左遷される以前からのものであり、劉歆は、哀帝が崩じた(8.C.6)後、再び王莽を通じて中央の官に復職している。この経緯について、『漢書』(36)劉歆傳に次のようにいう。

會哀帝崩、王莽持政。莽少與歆(劉歆)俱爲黃門郎、重之、白太后。太后留歆爲右曹太中大夫、遷中壘校尉、羲和、京兆尹、使治明堂辟雍、封紅休侯。典儒林史卜之官、考定律曆、著『三統曆譜』。

そして、このような律曆への關心が王莽の政治的野心と関わっていたことが、次の『漢書』(21・上)律曆志・上の冒頭からわかる。

至元始中王莽秉政、欲耀名譽、徵天下通知鐘律者百餘人、使羲和劉歆等典領條奏、言之最詳。

この王莽の野心は、同時期に生きる文人にとってただならぬ影響力をもち、孺子嬰の居攝元年(A.D.6)に『史記』に續く歴史書編纂の氣運を興す原因になった。⁽¹²⁾そして、この氣運を受けて辭賦文學の様相もそれまでとは違ってくる。

漢代辭賦の推移(中村)

その一例として、揚雄の場合を挙げると、王莽の始建國元年（A.D. 6）に、揚雄は「劇秦美新」を作る。辭賦作家、司馬相如の辭賦を模範とする揚雄が、「子虛・上林賦」のような、或いは後の班固の「兩都賦」のような國家讚美の賦を作らず、なぜ直接、「劇秦美新」という直叙體を用いたのかについては、その序（『文選』收録）にいうように、司馬相如の封禪一篇に倣ったからであることと、今一つ、先に見た「大人賦」に内在する思想性の問題との關わりが考えられる。つまり、揚雄は、老莊における「大人」をも超越する「幽玄」（陰陽の原理）を絶對視した。これは、揚雄が、「大人賦」を含めた辭賦全般が國家の存亡を含めた萬物の現象の根源に觸れていないことに氣づいたためである。當然、揚雄は、「天命」を理由づけに擡頭した王莽に對しても、すでにそのような表現機能に限界を見た辭賦の世界をもってしては讚美できないと考えたのである。結局、この政治上の混亂と過去の歴史への關心の高まりは、辭賦文學に對し、その創作と實質的効用の無關係さを暴露したともいえる。このような辭賦文學の情況を経てどのような賦が生まれてくるのであらうか。

王莽政權の崩壞にともない、光武帝の建武（A.D. 25—56）の時代が始まる。しかし、すぐに平穩な政治がもどるはずはなく、各地の行政面においても不安定な状態が續く。こういう混亂した情況の中に班彪（A.D. 3—55）がいた。光武帝建武元年（A.D. 25）、班彪は、王莽敗退の混亂期に長安を離れ、天水（甘肅省甘谷縣）に難を逃がれた。『後漢書』（39）班彪傳に次のようにいう。

（班彪）年二十餘、更始敗、三輔大亂。時隗囂擁衆天水、彪乃避難從之。

班彪はこの時、「北征賦」を作る。¹²⁾王莽政權の崩壞という歴史事實を目のあたりに見て、いかなる考えをこの賦

に託したのであらうか。

余遭世之顛覆兮

余、世の顛覆するに遭ひ

穽填塞之阨災

填塞のやうきい阨災に罹りぬ

舊室滅以丘墟兮

舊室滅びて以て丘墟たり

曾不得乎少留

曾て少らくも留まるを得ず

遂奮袂以北征兮

遂に袂を奮ひ以て北征し

超絕迹而遠遊

絶迹に超じて遠遊せん

これは「北征賦」の冒頭であるが、賦の構成、表現面において、すでに先人も指摘するごとく、劉歆の「遂初賦」を踏襲したところが多い。具體的には、「遂初賦」のように、長安を離れて天水を目ざし、「長都」、「瓠谷」、「雲門」、「郇邠」、「赤須」、「義渠」、「安定」、「泥陽」、「彭陽」とたどりながら、その地にまつわる歴史事實を叙述していく。また、「遂初賦」との類似句の中でも、「劇秦」に關する句、「北征賦」では「劇蒙公之疲民兮、爲彊秦乎築怨」と表現する句は、「遂初賦」では「劇彊秦之暴虐兮」と表現されており、「劇秦」という問題に班彪も劉歆も關心をもっていたらしいことがわかる。ただ、歴史に對する具體的な觀點を全體的に比較した場合、「北征賦」における史實の叙述は、『史記』に基づくものが多く、「遂初賦」の場合、宗周の衰退を中心にした『左傳』からの記事が目立った。それは、班彪の場合、『史記』に續く歴史書を編纂しようとしていたことにより、劉歆の場合、古文經との關係からである。

漢代辭賦の推移（中村）

「北征賦」中における主人公は、作者の班彪であるが、最終的な自己感情の發露の方向が「遂初賦」とは異なる。つまり「遂初賦」が、最終的に、遠遊する我身の行く先を老莊の處生觀に委ねるのに對し、「北征賦」は、我身の行く先に迷うのではなく、目前の社會的混亂への不安を訴えようとするのである。

夫何陰暄之不陽兮 夫れ何ぞ陰暄いんえんの陽ひてらざるや

嗟久失其平度 嗟ああ久しく其の平度を失ふ

諒時運之所爲兮 諒に時運の爲す所

永伊鬱其誰愬 永く伊鬱として其れ誰にか愬へん

「北征賦」は、このように「遠遊」型の賦であっても、賦のテーマは、作者が歴史の必然性に對して諦觀するところにある。その「亂」では、『論語』や『周易』に基づく孔子の言葉を引用し、時窮った時に君子が取る態度を述べる。⁽¹³⁾

夫子固窮 夫子固より窮すれば

遊藝文兮 藝文に遊ぶ

樂以忘憂 樂しみ以て憂ひを忘るるは

惟聖賢兮 惟これ聖賢なり

達人從事 達人は從事するに

有儀則兮 儀則ぎもを有つ

行止屈申 行止屈申

與時息兮 時と與に息す

君子履信 君子信を履みて

無不居兮 居らざるは無し

雖之蠻貊 蠻貊に之くと雖も

何憂懼兮 何をか憂懼せん

これは、「大人」の神仙の力を借りるのでもなく、「幽玄」の原理に従おうとしたのでもなく、所謂、經典にいう聖人君子の姿に準據しようとする儒家的態度なのである。「離騷」以來、「遠遊」篇、「大人賦」、「遂初賦」、「太玄賦」のいずれもが、老莊的性格の強い表現を基本的表現手段としていたのに比べると、辭賦に反映された思想の點から重大な變貌だと思われる。「遂初賦」において、すでに歴史への關心の高まりが賦全體の表現に見られたのであるが、自己の行く先を老莊思想に據ったことは、まだ「遠遊」型辭賦の基本的思想の枠内にあったのである。とすると、「北征賦」の特徴は、『史記』を意識した歴史への關心が、更に儒家的態度として打ち出される點にあるといえる。

このように、同じ「遠遊」型の辭賦の流れの上で、後漢に入ると、その根底にあった老莊思想が明確に歴史觀として變貌し、更に、辭賦全體を貫く精神が儒家的態度として表面に現われるようになる。そして、これが後の班固へと受け繼がれていくことになるのである。

漢代辭賦の推移（中村）

五

班固は、辭賦文學史の上では、「兩都賦」をもって知られる一人の辭賦創作家でもある。その創作活動が始まるのは、建武三十年（A.D.54）、父、班彪が望都（河北省清苑縣）に卒し、郷里安陵（陝西省咸陽縣）へ歸った年である。班固は、父の死を機にその歴史書編纂の事業を受け継ぐことを決意する。『後漢書』（40・上）班固傳では、それについて「父彪卒、歸郷里。固（班固）以彪所續前史未詳、乃潛精研思、欲就其業。」という。そして、この時、「幽通賦」を作る。「幽通」のテーマは、『漢書』に注を施した劉德（生卒年不明）が「陳吉凶性命、遂明己之意」と説明するとおり『易』理に基づく、運命論の究明である。この賦では、そのテーマの基に班固の歴史觀が述べられる。これは、直接には父、班彪の「王命論」からの影響が強い。「王命論」は、専ら漢の高祖の受命を讚美した論讀文であり、その論讀の根底に、火德による受命の正統性の主張（五行説）がある。その「王命論」の「精誠通於神明」や「能爲鬼神所福饗」に見える「精誠通」や「神明」や「鬼神」といった『易』の理念は、「幽通賦」においても、歴史の必然性を解く上での重要な概念として、「精通靈而感物兮、神動氣而入微」や「非精誠其焉通兮、苟無實其孰信」のように受け継がれている。また、この『易』理については、「幽通賦」の「亂」に到って更に明確に言及される⁽¹⁵⁾。

天造草昧 天の造すこと草昧にして

立性命兮 性命を立つ

復心弘道 心を復し道を弘むるは

惟聖賢兮 惟れ聖賢なり

渾元運物 渾元物を運らし

流不處兮 流れて處らず

このように、「幽通賦」では、「王命論」に述べられた五行説を踏まえて、『易』理に基づきながら歴史事實の必然性を究明することが中心的要素である。この点からいえば、父、班彪の「北征賦」に繋るもので、ひいては劉歆の「遂初賦」にも繋るのである。しかし、全體の表現スタイルの上からいえば、まず、「系高瑱之玄宵兮、氏中葉之炳靈。飄飄風而蟬蛻兮、雄朔野以颺聲。皇十紀而鴻漸兮、有羽儀於上京。」という自己の祖先の顯示で始まる點は、「離騷」の冒頭の手法であり、それ以後の展開も、紀行體、及び遠遊的的手法は用いていない。また、それまで見ることのなかった「魂覺覺與神交兮、精誠發於宵寐。夢登山而迴眺兮、覲幽人髣髴」という「幽人」との遭遇場面は、「王命論」にある高祖懷妊の際の「夢與神遇」を意識したものであろう。このように、表現スタイルの上で先の揚雄の「太玄賦」や劉歆の「遂初賦」と異なるだけではなく、辭賦全體を貫く精神という點からいっても、「幽通賦」が「北征賦」と同様、君子を意識した儒家的態度を重視することは、それまでのあり方とは異なるのである。たとえば、「侯草木之區別兮、苟能實其必榮」(『論語』子張「子夏聞之曰、……君子之道……譬諸草木區以別矣」)、「要沒世而不朽兮、乃先民之所程」(『論語』衛靈公「子曰、君子疾沒世而名不稱焉」)、「謨先聖之大猷兮、亦鄰德而助信」(『論語』里仁「子曰、德不孤、必有鄰」・『周易』繫辭上「子曰、天之所助者、順也。人之所助者、信也。」)等がそれであ

る。つまり、「大人賦」及びその後の「遠遊」型の辭賦の思想的根據であつた老莊思想に據るのではなく、孔子の儒家思想を根底に据えているのである。だからこそ、本文の最後に、「若胤彭而偕老兮、訴來哲以通情。」というのであろう。この句について、唐の李善(A.D. 630—680)は、「言人若欲胤彭祖之年、偕老聃之壽、當訊之來哲、與之通情、非己所慕也。」と解釋する。つまり、老莊の否定だったのである。

以上、「大人賦」以後の辭賦を、「遠遊」という表現スタイルに着目しながら考察してきたが、「大人」の存在が、その時代の政治思想や天子の興味の度合いにより辭賦の主人公としてではなくなった反面、「遂初賦」や「北征賦」のように、「遠遊」型に依據し、自己の體驗を通して自己の運命を考え、また、時勢の混亂を歴史的必然性として見ていく辭賦が生まれてくる情況が明らかになったように思う。そして、このような前漢末期から後漢初期にかけての辭賦文學の動向は、直接には班彪の「北征賦」を通して、後漢中期の班固に受容され、「幽通賦」として提出された。しかれば、この「幽通賦」に表現された歴史觀と儒家的態度は、班固による、「遠遊」型辭賦の總括ともいうべきものであろう。

(注)

- (1) この頃の辭賦文學の情況については、岡村繁氏「漢初における辭賦文學の動向」(『鳥居久靖先生華甲記念論集』中國の言語と文學一九七二・十二)に詳しい。

- (2) 福永光司氏「『大人賦』の思想的系譜——辭賦の文學と老莊の哲學——」(京大人文研『東方學報』41・昭和45・3)

や竹治貞夫氏『楚辭研究』第六章「遠遊の成立」(昭和53・3)においてすでに指摘がある。

- (3) 伊藤正文氏「所謂『紀行』の賦について——『遂初賦』・『北征賦』をめぐる——」(『小尾博士古稀記念中國學論集』昭和58・10)の中で、この期間の辭賦、特に「遂初賦」と「北征賦」とを中心に「紀行」の賦の文學史的位

置づけがなされており、この拙論「漢代辭賦の推移」を考える上でも参考にすべき貴重な論が展開されている。ここでは、それを更に「大人賦」の變貌という視點に立ち考察してみた。

- (4) 前掲論文(福永氏と竹治氏)及び竹治貞夫氏「楚辭遠遊文學の系譜」(『小尾博士古稀記念中國學論集』昭和58・10)で考察されている。

- (5) 清・王念孫『讀書雜誌』漢書雜誌に據りて「儒」を「傳」に改む。

- (6) 司馬遷は『史記』の中で歴史と天命について考え、董仲舒は『春秋繁露』の中で、政治思想と天命について考えた。

- (7) 劉勰『文心雕龍』に、楊雄の學問と辭賦とのかかわりを評價したところがある。才略篇「然自卿(相如)淵(王褒)已前、多俊才而不課學、雄(楊雄)向(劉向)以後、頗引書以助文。此取與之天際、其分不可亂者也。」事類篇「夫經典沈深、載籍浩瀚、實聖言之奧區、而才思之神皇也。楊(楊雄)班(班固)以下、莫不取資、任力耕耨、縱意漁獵。」また、楊雄の賦については、町田三郎氏「楊雄の賦について」(『中國詩人論』岡村繁教授退官記念論集、昭和61・10)を参考にした。

漢代辭賦の推移(中村)

- (8) 清・顧實『漢書藝文志講疏』(商務印書館發行)の「四・詩賦略、屈原賦二十五篇」にいう。以下、顧實の意見はこれに基づく。

- (9) 『古文苑』卷五、劉歆「遂初賦」の序において、この作品の成立理由について述べる。「遂初賦者、劉歆所作也。(中略)歆好『左氏春秋』欲立於學官。時諸儒不聽。歆乃移書太常博士、責讓深切、爲朝廷大臣非疲、求出補吏、爲河内太守。又以宗室不宜典三河、徙五原太守。是時朝政已多失矣。歆以論議、見排擯、志意不得、之官、經歷故晉之域、感今思古、遂作斯賦、以歎往事而寄己意。」

- (10) 「孫臏」については、『左傳』襄公十八年「夏、晉人執衛行人石買于長子、執孫臏于純留、爲曹故也。」とあり、「王師」については、『左傳』成公元年「元年春、晉侯使瑕嘉平戎于王、單襄公如晉拜成、劉康公徵戎、將遂伐之、叔服曰、背盟而欺大國、此必敗、背盟不祥、欺大國不義、神人弗助、將何以勝。不聽。遂伐茅戎、三月癸未、敗績于徐吾氏。……秋、王人來告敗。」とある。

- (11) 前掲論文(福永氏)で、『楚辭』遠遊篇の中の老莊に基づく、もしくは老莊と關連する表現を逐一拾われている。

- (12) 『後漢書』(40・上)班彪傳「武帝時、司馬遷著『史記』、

自太初以後、闕而不錄、後好事者頗或綴集時事、然多鄙俗、不足以踵繼兵書。」の唐・李賢注に「好事者謂楊雄、劉歆、陽城衡、褚少孫、史孝山之徒也。」という。

(13) 『文選』(李善注) 卷九・「北征賦」には李善注に、晉・摯虞の「文章流別論」を引いて、「更始時、班彪避難涼州。發長安、至安定、作北征賦也。」という。

(14) たとえば、「夫子固窮」は『論語』衛靈公「子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣」に基づき、「遊藝文兮」は『論語』

述而「子曰、志於道、據於德、依於仁、遊於藝」に基づき、「樂以忘憂」は『論語』述而「子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至也云爾」に基づく。

(15) たとえば、「天造草昧」は、『周易』屯「象曰、屯剛柔始交而難生、動乎險中。大亨貞、雷雨之動滿盈。天造草昧、宜建侯而不寧。」に基づく。